

通信

NO. 53
平成29年6月号

ビジネス総研株式会社

福岡市博多区博多駅前4丁目

33番11-702号

☎092-409-4177

今月のスケッチ



長崎の眼鏡橋のたもとで、この地では、“オタクサ”と呼ばれている“あじさい祭”が開催されていました。

“あじさい”は、出島のオランダ商館医・シーボルトが、長崎で運命の女性・お滝さんと出会い、国外追放の身となって、あじさいに最愛の人の名前から“オタクサ”と学名をつけ、ヨーロッパに紹介しました。

=====

スタ
コラ

働き方改革と社長バカ

森本 信明

初めて“働き方改革”という言葉聞いたときに、うんうんと頷きました。

ところが、実際にこの改革を実現するために提言されている施策のほとんどは、働き方と

いうよりも「働かせ方」のように思えてきます。

長時間労働を制限することや同一労働同一賃金、女性・若者・高齢者の活用には何の異論もありませんが、「働かせ方」改革でなく“働き方改革”と呼ぶからには、社員側の自発的なアクションをもっと積極的に促すようなドラスティックな施策、たとえば、残業したい社員にはジャンジャン残業させるくらいの方が、本来の“働き方改革”ではないのか。暴論でしょうか。

残業の理由は下のいずれかでしょう。

①残業手当が欲しい／上司がまだいるので帰りづらい／家に帰りたくない②予定にない割り込みが発生した(アクシデント)③今日のノルマが達成していない(指示者のミス)④この業務を今日中に仕上げたい⑤残業しないことにより会社の利益を大きく損ねる⑥残業しないことにより他の社員やお客さまに迷惑がかかる。⑦残業することにより大きな業務成果や顧客満足が得られる

後半3項目は、実のところ、その社員の勝手な思い込みである可能性もありますが、もっと頑張りたいというモチベーションは安易に否定すべきではないのではないのでしょうか。なかなか難しい課題です。

ワークライフバランスにつ

いてですが、本来の意味(だと私が勝手に考えているだけかもしれない)は「仕事によるストレスを仕事以外に及ばせない」です。

ストレスというのは精神的重圧だけでなく、長い労働時間や低賃金も含まれます。

ストレスを低減するための具体的な取り組みが“働き方改革”の項目として掲げられていますが、いわば、マイナスを生じさせない・マイナスを小さくする取り組みに過ぎないとも言えます。

政府レベルではこんな所。仕方ありませんが、ここで登場するのが“社長バカ”。

社員のストレスを軽減するのではなく、社員に夢や希望や達成感を与える、プラスをどう創出するのが社長バカの腕の見せ所。これは政府には決してできません。

社員個々にはいろんな価値観や考え方があるので一様にはいきませんが、社長バカの施策にまんまと乗っかってくれる(=思いを共有してくれる)優秀な社員バカ(???)が数多くいる組織を目指したいものです。

庭の紫陽花が満開



今年も、庭の紫陽花はが、大輪の花を付けました。

この「通信」の封筒詰めと宛名シール貼りは、「障がい者の仕事をつくる」NPO法人ホーキーズの皆さんにお願いしています。丁寧な作業を心がけていますが、袋や用紙、宛名カードの材質の影響で、多少のずれやしわ、ゆがみなどはご容赦ください。



映画大好きの山ちゃんが、毎回、自分の言葉で執筆します。



集金旅行

監督：中村 登
出演：佐田 啓二
岡田茉莉子
花菱アチャコ
伊藤雄之助
1957年 松竹大船

僕は、昔の映画を観る時、福岡市総合図書館の中にある映画館シネラを利用している。

5月(2017年)は特別企画として、中村登監督特集が行われた。

中村登は松竹大船撮影所の伝統を継承するホームドラマの巨匠であり、特に女性を主人公とするメロドラマや文芸作品を得意とした監督だ。

物語は…。

ギャンブル好きの山本は、女房に逃げられたショックで一人息子の勇太を残して急死してしまう。

アパートは借金の抵当に入っており、住人達は相談の結果、アパートの未払い家賃や山本に借金した人たちから集金し



巣立ち間近 うきは市・道の駅「うきは」

道の駅「うきは」には、何組ものツバメが巣作りし、6月に入ってからは、その雛が巣立ちの時期を迎えている。この日、親ツバメとほとんど同じくらいに成長したひな鳥が、巣から出てもエサをねだっていた。

てまわることにするのだが…。中村監督の喜劇の代表作であり、岩国の錦帯橋や山口、萩、尾道、徳島の阿波踊りなど各地の風物が盛りだくさんに描かれている。

懐かしい昔の風景が観れたこと、そして花菱アチャコと岡田茉莉子の上手な阿波踊りに感動した。

くまさんの コンサル日誌



似顔絵作家の小西みどりさんに描いていただきました。

地域おこしの一つとして様々な“イベント”がおこなわれている。

この日、長崎県壱岐市では、29年目を迎えた、島内を1周

する“壱岐サイクルフェスティバル”が開催され、630名が疾走した。



そして、この多くが島外からの参加者で、1週間以上も前から宿泊している選手もいて、大きな経済効果があったようだ。



編集後記

“モリ”“カケ”とそばにも掛けられる“付度”が国会でも、報道でも、連日続いている。

しかし、いずれも、真相が解明されないままの状況が続き、“もやもや感”が続いている。

季節も暑い季節を迎えているが、政治の世界も熱い季節を迎えるのだろうか。

このままウヤムヤにはしていけないと思う